

## 6 開発独裁期における

# 農民の経済的生存戦略再考

—資本主義-小農社会の接合の一端—\*

アン スン テク ・ イ ソン ホ  
安 勝 澤 ・ 李 成 浩

### 1. 序論

本稿では、都市化・産業化・離農が進む農村で生き残った農民の経済的生存戦略を分析する。特に圧縮的な成長が本格化する韓国社会の時代的・社会的条件の下で、次第に限界状況へ押し出された農村と小農の対応の様相を、ある農民の日記記録を中心に分析する。この分析を通じ、時期的・地域的・個人的特殊性が開発独裁期の国家主導の資本主義的な経済開発政策と絡み合うなかで、そうした政策に服属・離反する過程と論理を提示することが本稿の目的である。

この作業は、小農社会を「養父」として、その理念的・物質的支援の下で成長した韓国の資本主義と、養父を農村に「遺棄」することに対する養父側の対応を考察する企画であるとも換言することも可能である。これを通じて、本稿ではそうした「遺棄」行為の対象となった小農が、どのようにこの「遺棄」行為と共謀し、そこに参加したのか、また参加しなかったのか、結果的に農村で生き残った小農たちを、その「遺棄」行為と関連させながら、研究者がどのように評価すればいいのか、これらの問題を議論するための一資料を提示したいと思う。また、こうした試みは朝鮮後期以

---

\* 本稿は2014年、韓国政府教育部の財源で韓国研究財団の支援を受け行われた研究である（NRF-2014S1A3A2044461）。

来の小農社会の展開という歴史的な動きを、現代社会の局面から検討する作業にもなるだろう。

韓国史において小農社会論は、東アジアの地平から朝鮮後期社会の歴史的な性格を理解するものとして成立・発展した<sup>1</sup>。よって、現代農民の経済活動に対する理解と小農社会の展開とを結合させる本稿の立場については、疑問が提議されうる。しかし小農社会論は当初、東アジアで決定的な歴史的断絶が近代以前と以降ではなく、小農社会の成立以前と成立以降に分岐するという議論から出発した<sup>2</sup>。また、最近小農社会論は「儒教的近代」という概念（韓国史では17世紀から20世紀まで続いたものと考えられる）によって、東アジアの近代を再構築しようとする議論として発展もしている<sup>3</sup>。こうした巨大な立論についてはもちろん賛否両論が存在しうるが、だからこそ、もし現代韓国社会が在来の小農社会から何かを受け継いだのならば、その遺産について検討を重ねていくことは重要なはずである。

この場合、現代韓国の農村社会が農地改革などの現代史的要因によるものと、在来の小農社会から継承されたものとの相関関係などが、より検討される必要があり<sup>4</sup>、これは朝鮮後期・植民地期を理解する枠組みとして、

---

<sup>1</sup> 宮嶋博史「東アジア小農社会の形成」溝口雄三・濱下武志・平石直明・宮嶋博史編『長期社会変動』東京大学出版会、1994年；이영훈「한국사에 있어서 근대로의 이행과 특징」『경제사학』 21, 1996；「조선후기 이래 농촌사회의 전개와 의의」『역사와 현실』 45, 2002.

<sup>2</sup> 脚注4を参照。それだけではなく、小農社会論は世界史的に農業での資本-賃労働の関係は例外的にのみ成立し、特に東アジアのような集約農耕地域では小農経営こそが、資本主義システムに非常に適合した農業経営形態だという中村哲の枠組を前提に成立したものである。마츠모토 다케노리「전후 일본에 있어서의 조선근대경제사연구의 계보」『역사문화연구』 53, 2015, 88쪽.

<sup>3</sup> 宮嶋博史「儒教的近代としての東アジア「近世」」和田春樹ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史』第1巻、岩波書店、2010年；미야지마 히로시『나의 한국사 공부: 한국사의 새로운 이해를 찾아서』너머북스, 2014.

<sup>4</sup> 조석근「20세기 한국토지제도의 변화와 경자유전 이데올로기」안병직 편『韓國經濟成長史: 예비적 고찰』서울대학교출판부, 2001；조석근「식민지근대를 둘러싼 논쟁의 경과와 그 함의: 경제사학계의 논의를 중심으로」『역사문화연구』 53, 2015.

小農社会論や儒教的近代論に対する評価（もちろん密接に関連するが）とは、問題のレベルが若干異なる<sup>5</sup>。どの立場に立とうが、「耕者有田」の原理が制憲憲法に明示され、農地改革によって小農的土地所有が法律制度として実現することで<sup>6</sup>、現代農村が一定程度在来の小農社会の遺産を継承しつつも、それを適応・変形させる過程で小農体制を展開させたという点には疑問の余地がない。本稿は「資本主義と小農社会の接合」という見地から、その事例とその解析を提供したい。

解放以後の韓国社会での小農体制の展開に関する既存の研究を簡略に整理すると、「両極分解論から中農標準論へ」という流れに要約することができる。概して1960年代までの研究史は、マルクス主義的な資本主義分析に基礎を置く両極分解論が大勢であった。一方で、これは植民地主義の分析から出発した理論的傾向が、解放後の韓国農業に対する分析に引き継がれた結果でもあり、また実際にも1950年代から1960年代末までの農民層分解の様相は両極分解の傾向を示していた<sup>7</sup>。

---

<sup>5</sup> 朝鮮後期および植民地期の理解と関連した最近の整理としては次を参照すること。권내현 「내제적 발전론과 조선 후기사 인식」『역사비평』111, 2015；정연태 「일제의 한국 지배에 대한 인식의 갈등과 그 지양：한국 근대사 인식의 정치성」『역사문화연구』53, 2015。

<sup>6</sup> 1948年の憲法第86条は次のように記している。「農地は農民に分配し、その分配の方法、所有の限度、所有権の内容と限界は法律として定める」。現在もこの理念は農地改革法を廃棄し、その代替立法として農地の農業目的所有とその上限を規定した農地法（1994年公布、1996年施行）内に残存する。しかし内容的に見ると、1948年に体制が規定した法制としての小農社会は、国際貿易秩序で農業の一時的な例外的地位の認定を破棄した1994年のウルグアイ・ラウンド協商妥結によって、解体したと考えることができる。農地所有の上限は、1949年の農地改革法の制定以来の3haから1994年の10ha（農業振興地域に限定。農地管理委員会の確認を受け、地方自治団体が農地売買証明を発給する場合、20ha）として調整された。

<sup>7</sup> 解放以降、韓国社会の農民層の分解様相を分析した実証的研究を考えると、総じて1968年を起点として、それ以前は両極分解の様相が目立って現れることが確認されている。박진도 「농촌주민의 계층구성 및 그 성격에 관한 사례연구」『충남대경상논집』3(2), 1981；이영기 「1960년대 이후의 농민층 분해에 관한 연구」서울대 농업경제학과 석사학위논문, 1982。

他方、1960年代末、または1970年代初頭から、少なくとも1980年代前半までの分解の様相は中農標準化の傾向があり、先述したように研究史動向の中心移動は、やはりそうした流れを反映したものであると考えられる。この時期の中農標準化傾向は、貧農層の上向分解を中心になされたものではなく、脱農による貧農層の減少と資本家的農業経営への転換が閉ざされる状況で、富農層の全般的な下向分解現象として現れたものである<sup>8</sup>。一方では、このような趨勢は「家族労働の完全な消耗を通じた、耕作可能な最大規模の農地面積としての標準化傾向」という特性を帯びながら展開していた<sup>9</sup>。これによれば、1950年代から1960年代にかけての両極分解として把握された現象は、上層農に規模の優位を確保するほどの生産力の発達が成立しない状態で、農村内部に存在する広範囲な低賃労働力の活用可能性が、上層農の農地への投資拡大へと繋がった結果であった。翻って1960年代末以降には、急速な工業化と都農格差の拡大、農業の受益性の悪化などにより大規模な離農が起こり、これによって低賃労働力の動員ではなく家族労働力の完全燃焼が、この時期の農民層分解の主たる要因になった。

このような議論は、韓国だけでなく全世界的に第三世界の貧困層の生存戦略が家族労働の消耗、節約と耐乏、そして世代移動の情熱（子どもの教育への投資）であったという指摘<sup>10</sup>と結合することで、この時期の農業部門における小農体制の温存が、資本主義と小商品生産部門との接合の結果だという説明につなげることができる。実際、本稿で分析の対象となる『牙浦

<sup>8</sup> 윤수중 「농민층의 계급론적 성격」 서울대사회학연구회편 『사회계층』 다산출판사, 1990; 박진도 『한국자본주의와 농업구조』 한길사, 1994.

<sup>9</sup> 윤수중 「농촌 내부의 경제적 집중에 의한 농민층분해와 농민간 갈등」 『농촌사회』 11(2), 2001; 박진도 「이농의 전개과정과 그 의미」 한국농촌경제연구원 『한국 농업·농촌 100년사 논문집 제2집: 한국 농촌사회의 변화와 발전』 한국농촌경제연구원, 2003.

<sup>10</sup> 김차두 「도시비공식부문의 가족노동」 『논문집』 9, 부산산업대학교, 1998; 권오훈 「도시빈곤층의 직업 형성과정: 서울시 빈곤지역을 중심으로」 『사회과학논총』 10, 한양대학교, 1991; 김경일 「1960년대 기층 민중의 가계와 빈곤의 가족 전략」 『민주사회와 정책연구』 28, 2015.

日記』(以下『日記』)にも、このような家族労働力の完全燃焼、子ども世代の階層移動のための献身的な教育への投資、そのための勤勉と節約の強調、小商品生産部門への絶え間ない集中的投資などが、まさに切実な記録を通して刻み込まれている。経済学における理論的仮説とは異なり、現代韓国の資本主義が家族営農と独立経営、勤勉節約と下向・中農標準化を特徴とする小農体制を解体するどころか、小商品生産部門との接合を土台として、それに依存し、むしろそれを強化していったという点<sup>11</sup>は疑いの余地がない。しかし、これは未だに一般的に共有された認識ではなく、本稿はこの点を確認しながら歴史的な意味を付与することにも注力する。

ところで上記のような説明にもかかわらず、依然として疑問として残るものがある。それは上のような形態で農村に残ることになった小農は、やはり単に子ども世代の都市進出だけを念頭に置き、農業を営んできたのではないということ、どのように説明するのかという問題である。即ち、彼らは自らも青年期から絶え間ない都市進出を希求し、都市移住を漠然な希望として持っただけでなく、実際の行動へと移し、その行動をしながらも、結局は農村に残ることになった。この問題を無視して、「資本主義と小農社会の接合」だけを議論の結末とするのは、歴史学と社会科学が解決すべき「人間」の問題に、故意に目を閉じるのと同然である。

もちろん、これは歴史学と社会科学がその間、説明に注力してきた時代と構造の産物であることも明らかであり、本稿はこの次元についての説明を排除するものではない。しかし、ここには同時代的であったり、一国的な要因としては説明不可能な、時期的・地理的・個人的要因と選択が介在する。実際、農村を去るか残るか、去って何をするのか、あるいは残って何をすることができるのか、実際に何をすることとなったのかという問題

---

<sup>11</sup> 임수환 「박정희 시대 소농체제에 대한 정치경제학적 고찰 : 평등주의, 자본주의 그리고 권위주의」 『한국정치학회보』 31(4), 1997.

は、実際のところ前者よりは後者〔時期的・地理的・個人的要因〕に関連して決定されるといえる。ここでいう時期的・地域的・個人的要因には、数年や数ヶ月間継続する時期的要因、あるいは市・郡・面や村落単位の地域的  
要因、または階級やパーソナリティなどの特性はもちろんであるが、単にある瞬間や、ある場の固有的な状況や心理の変化のような個人的要因もそこに含まれるだろう。

そのことをもって「(主に前者と関連していると考えられる)必然は(主に後者と関連していると考えられる)偶然を通じて貫徹する」と言ってしまうことは、「時代的・一国的・構造的説明は無能力である」という学問的な懐疑主義と同じぐらい無責任なことである。本稿はそうした認識のもと、不十分ながら、両者の要因が結合する方式についての説明にも力を入れる。彼らは国家の政策的支援と圧迫、資本の支配力強化という構造的要因に対応する小商品生産者であり、時に国家に依存し適応しながらも、一方では依然として一貫した支配を完成できない国家と資本の隙間を探す必要があった。また場合によっては、彼らは国家に抵抗したり迂回する行為主体であった。本稿では彼らに注目し、農民層の生存のための複合的・多面的戦略の断面を探ることで、都市賃金労働者や非公式部門の労働者の経路でもなく、農村の貧困層への転落という経路でもない、現代農村での小農的生存方式に歴史的意義を付与することを試みる。

## 2. 『牙浦日記』にこめられた時期・地域・記録者の基本的性格

### (1) 1970年代の牙浦と『牙浦日記』

『日記』の主人公であるクォンスドク権純徳は、1944年に慶尚北道キムチヨン金泉市ア、ボウブ牙浦邑<sup>12</sup>

---

<sup>12</sup> 当時は慶尚北道金陵郡牙浦面であったが、1955年1月に金泉市に統合し、同年3月に牙浦邑へ昇格した。

デシルリ  
大新里で生まれ、その後ずっと故郷のマウル〔村落〕で生活している。彼は軍を除隊した後、満25歳になった1969年から現在まで日記を書き続けてきた。彼の『日記』は、韓国社会の近代的開発が本格化する時期を生きてきた、貧しい農民の生活の軌跡について描いている<sup>13</sup>。

権純徳は安東アンドン権氏ヨンジョの英祚氏の1女5男のなかで、3番目に生まれた。彼の父・権英祚は解放前、約3,600坪の農地を所有していたが、解放後に所有地は敵産として没収された。権英祚の子どもたちも、父の財産が没収された理由については分かりかねるという<sup>14</sup>。

権純徳が『日記』を書きはじめた1965年当時、彼の家族は小作農として生計を立てていた。彼は初等学校を卒業後、両親を助けるために農業を助けた後に入隊した。軍を除隊した20代の初めから両親、兄とともに本格的に農業をはじめますが、20代で両親が亡くなった後は、3人の弟妹が高等学校の教育を終えて就職し分家するまで、実質的な家長の役割を担った。権純徳が『日記』を書きはじめた1969年当時も、彼の家族は小作農として生計を立てていた。彼は1972年5月に妻・李允心イユンシムと結婚し、2女1男をもうけた。



権純徳

<sup>13</sup> 彼の日記は全北大学校・個人記録研究団の入力・解題作業を経て、2014-2015年に『농민 권순덕의 삶과 기록 : 아포일기』全5巻（1969～2000）として出版された。

<sup>14</sup> この事実を証言した権純徳は、幼少期にそのように聞いただけであり、その詳細な内容は分かりかねるという。金泉・権純徳家、訪問インタビュー、2014. 4. 3.

3人の子どもたちは大学教育を終えて都市で就職した後に結婚し、農業を引き継いだ後継者はいない。

除隊後、權純徳は当時の都市化、産業化趨勢の影響で都市移住の夢を抱いたのであるが、短期間の都市経験を終えて、故郷へと戻った。故郷で權純徳は、他人の土地を借りて農業をする小作農であり、農閑期には近隣的高速道路や新都市建設現場に行き、肉体労働をする労働者でもあった。また自転車修理店を開き、家庭用の上下水道工事と修理を担う零細自営業者でもあり、農繁期には隣家の田畑や果樹園へ行き労働力を売る農業労働者であった。それだけでなく、彼は収穫した果実や野菜を直接市場へ持ち込み、それらを売る行商も行うようになった。

このように農村に居住しながら、都市の日雇労働者と非公式部門の従事者、農業労働者と零細小農と小作農の生活を順々に、時に同時に経験した彼の生涯は、資本主義的開発過程で考えられてきた典型的農民像とは、異質なものに映るかもしれない。もちろん權純徳の事例は多少極端であったかもしれないが、このような農民の労働の様相は産業化段階に入った第3世界の貧困層で一般的に現れる姿であり、韓国社会での大部分の小農たちが生計能力を最大化させるために、選択した重要な生存戦略の一つであった。

例えば『<sup>ピョンテテゴック</sup>平澤大谷日記』(1959-2005)の主人公・<sup>シングォンシク</sup>申權植(1929-)は、結婚初期の1965年頃まで、生活費の不足を補うために隣の塩田と堤防工事の現場へと行き、雑夫や現場監督などの日雇労働をしていた<sup>15</sup>。京畿道水原市<sup>スウォン グァン</sup>光教山<sup>ギョサン</sup>は、日帝時代はもちろんのこと、解放以降まで「水原全体で、人々がこの山を剥がして生活していた」と語られるほど、薪・木材業をよくした場所である。この山の麓のマウル<sup>マウル</sup>の農民によると「この集落に木材業をしない人はいない」と語られるほどであった。しかし木材業が衰退する1960

<sup>15</sup> 지역문화연구소 편 『평택 일기로 본 농촌생활사 I : 평택 대곡일기 (1959-1973)』 경기문화재단, 2007, 33, 42, 68쪽.



年代後半以降になると、農民らは農閑期に集落から近隣の都市へ出て、産業化・都市化の建設現場で使用される砂利採取に就くようになった<sup>16</sup>。こうした例は韓国全体で見受けられたようである。

もちろん権純徳の事例においては、他の地域・時期、また他の農民の生活からは観察することのできない独自の特徴も現れる。彼の故郷・牙浦邑大新里は、金泉市の近郊農村として一帯でもっとも広大な平野を持つ地域である。また1960年代以後、国家的開発戦略の中心地であった韓国の国土の南東部地域に位置しており、地域開発政策の計画に含まれた地域でもあった。そして1970年代、国家の主要育成産業の電子産業の集積のために設計された亀尾市の電子産業団地、及び都市建設事業の現場がまさに牙浦邑の近くにあった。加えて、マウル的前方に広がる金泉最大の農地の向こうには、ソウルと釜山を結ぶ京釜高速道路が通ることとなった。このような時期的・地域的特性は、権純徳が農閑期に建設現場の肉体労働の職場を探す一助になっていた。これらの特性によって権純徳は1960年代後半以後、急速に進行する農村地域の脱農と都市移住の行列に合流せずとも、都市労働者や非公式部門の職を探し、賃金労働に従事することができたのである。

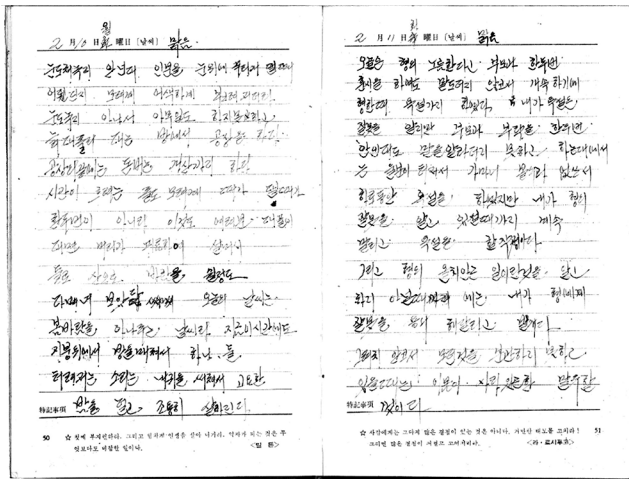
以下では、このような地域の特徴を帯びた牙浦邑を背景にして記録された『日記』の内容を中心に、零細小農であった権純徳が1970～80年代という時代を経ながら、自分のマウルで最大の土地を耕作する中農に成長するまでの過程を検討する。いわば、韓国社会の開発独裁時期の農民の生存戦略を考察すると同時に、農業を排除・犠牲にすることで経済構造の近代化を推進した時期、一見これと相反すると考えられる小農から中農への転換が可能であった条件を論じる。

---

<sup>16</sup> 안승택 「광교산 마을의 공동체 문화」 수원박물관 편 『광교산이 품은 두 마을과 연무대 옆 마을 : 수원시 상광교동・하광교동・연무동』 수원박물관, 2015, 195~203쪽.

## (2) 貧農青年の都市への憧れと挫折

基本的に權純徳の日記は、農村の貧しい青年が未来の生活を計画し、それを遂行するための決心に念を押すことと関連している。『日記』が、「全世界の甲富の遊説を聞いてみれば、30歳未満に基盤を築いたという。私は35歳には基盤を築くと決心する(69.1.3)」という記録から出発する点は印象的である<sup>17</sup>。彼の生活設計は「金を稼いで成功すること」であり、それは「計画(69.2.6; 2.8; 2.15など)」を立て、それを「明日に延ばすことなく(69.2.6)」、「たゆまず(69.2.7)」、「勤勉に(69.2.15)」、「熱心に(69.2.29)」、「我慢して、推し進める力が(69.6.26)」がないと不可能なことであった。即ち、彼にとっての成功は、「待つことではなく、自分自身が進んで作っていかなければならない(69.2.29)」ものであった。



『牙浦日記』

<sup>17</sup> 以下『日記』からの直接引用は原文で頻繁に出する方言と誤記が読者の理解を難しくするという点を勘案し、現行のハングル表記法に従って文章を改めた。

しかし貧しい小作農出身の青年が農村で金を稼いで成功するというのは、簡単なことではなかった。「(貧農出身の彼が) 他人より貧しくて、他人の家の小作をして、他人の仕事をして飯を食わなければ」という彼自身の境遇が、「人生について、生きる価値がなく無意味」であるとして (69. 6. 11)、都市へ行って金を稼ごうという計画を立てたことは、ある意味で当然な帰結であった。韓国社会での農民層の脱農が増加し農村人口が減少する時期が1967年以後であること<sup>18</sup>を勘案すると、彼が日記を書き始める1969年は農村の青年たちの都市移住が本格化する時期でもあった。

そこで彼は仁川<sup>インチョン</sup>に住む友人に手紙を書き (71. 2. 13)、列車で上京した (2. 27)。数日間、職を探し歩き回るが、都市での生活が簡単ではないという事実を確認しただけであった。偶然、アイロンの訪問販売である「月賦商売」の仕事を得て、数日間だけ市内の住宅街を歩き回ったが、「仕事をして、食費にもならない (71. 3. 7)」という気がして、辞めてしまった。彼の友人たちは、仁川でもう少し暮らしながら、都市の世情について知るようになれば、ましな職業も見つかるのではないかと説得したのだが、彼は帰郷を決めてしまう。「初め来た時は、食費を稼いでも稼げなくても1年 (71. 3. 8)」は我慢してみようと決心していたが、たった10日間でこの決心が水泡に消えてしまったのである。

離農民たちの都市適応への一番の障害物は、彼らの学力が低いということと、技術が不足していたため都市の資本主義労働市場への参入が困難であったという点にある<sup>19</sup>。初等学校の学力に満たない小作農出身であった権純徳の都市での初職がアイロンの行商であったという事実は、この点を裏付けている。このような困難を打開するために、離農民は社会的関係

---

<sup>18</sup> 농림부 『농림통계연보』 1968.

<sup>19</sup> 권오훈, 前掲論文, 112頁.

ネットワークを通じた集団的対応戦略を活用し<sup>20</sup>、移住地域を決定する時から、まず移住した同郷の人々との交流を通して情報を得ていた。よって離農民たちが最初に定着する都市の居住地は、同郷の人々が集まって住む集団居住地の特性を帯びていた<sup>21</sup>。

しかし軍から除隊したばかりの20代の農村青年が、都市内部で確保できる交流網は非常に狭小なものであった。そして、いち早く都市へ移住した故郷の同年の友人らが提供できる職業の情報や、都市定着のための援助は、精神的な慰労や友情以上のものにはならなかった<sup>22</sup>。これらの点から、権純徳の仁川行きは綿密に準備された離農ではなく、当初から成功し難いものであった。彼が失敗する理論的・構造的な原因は、都市の資本主義産業部門の労働市場が相変わらず狭かったという点に見いだすことが可能である。しかし、権純徳は農業での労働においては執拗なほどに根気と根性を発揮しており、この頑健な労働の意思は、その後の生活における貧困脱出のための唯一な武器でもあった。それにもかかわらず、辛抱強い彼が長い間苦悩し決心した都市移住を、わずか10日間で諦めさせた直接的な原因は何であったのだろうか。

権純徳の帰郷への決心は、故郷の牙浦が直面した1970年代の地理的・社会的条件と関連している。彼の故郷である牙浦邑大新里は、金泉市とわずか10kmの距離にある近郊農村として、都市との接触が多かった。また

---

<sup>20</sup> 허석렬 「도시 무허가정착자의 고용구조: 사례연구」 『한국사회연구(1)』 한길사, 1983 ; 박영숙 「도심지민민은 어떻게 살아가는가」 『한국사회연구(2)』 한길사, 1984.

<sup>21</sup> その結果、彼らの地域は同郷出身者が集団で居住する一種の居住共同体を形成し、近隣間の互助関係や金銭関係などから農村型の共同体が部分的に維持されていた。いわば、離農民らで構成された都市周辺地域は、一定期間の「都市の中の農村」であった。이성호 「신민곤충 사회적 네트워크의 헤체와 대응 전략」 남춘호・이성호・노중기・진양명숙 『전북지역 민주노조운동과 노동자의 일상』 한울, 2009, 216쪽.

<sup>22</sup> 後に、高等学校を卒業した権純徳の第2人が、ソウルと釜山で職を探し定着しようとして失敗してしまったことも (71.9.8 ; 80.7.4)、彼と同じ社会的交流網の不在によるところが大きい。

1968年から開始するソウル - 釜山間の京釜高速道路建設事業がマウルの前方、500mの距離で進行していた。特に1969年から着手された亀尾産業団地建設現場はマウルから15kmも離れておらず、マウル前の大新<sup>テシン</sup>駅から現場まで車で結ばれていた。実際、彼は1969年から農閑期には高速道路建設現場へ行き、肉体労働をしながら現金収入を得ており、その現金で「孵化ヒヨコ200羽(69.7.3)」を育てようと計画を立てることもあった。このように、故郷のマウルでも肉体労働の職はいくらでも探すことができるという考えが、彼の帰郷への決心を早めたと考えられる。

彼の都市生活に対する夢は、農業だけではなく労力を要する肉体労働から脱出したいという欲望であった。しかし技術資格や社会的関係網を確保できない権純徳にとって、都市では経済的機会が少なく、競争が激しく切迫した生存の現場<sup>23</sup>であった。これに比べて、故郷のマウルは彼により多様な経済的機会を提供することができた。短い都市生活のなかで、この事実を確認した彼は、すぐに帰郷を決心したのでらう<sup>24</sup>。

### (3) 結婚後の故郷定着と工場労働の忌避

帰郷後も権純徳は、しばらく商業に対する夢を諦めることができず、農業には集中できなかった。「服生地の商売をするのが良い(70.12.29)」という友人の話に意欲的になり、ふろしき商売(行商)・穀商(71.1.2)をしようと決心した。また「見知らぬ土地での生活をもう1度してから、農業につく予定(71.3.9)」とし、亀尾市や倭館<sup>ウェグアン</sup>邑などの近隣の都市を念

---

<sup>23</sup> Roberts, B., *Cities of Peasants: The Political Economy of Urbanization in the Third World*, London: Sage Publications, 1978, p.141.

<sup>24</sup> もちろん彼は故郷へ戻っても、都市での生活への夢を完全に諦めることはできなかった。帰るとすぐに、「他人に会うのが恥ずかしくて、外出もできない」、それで「客地生活を、もう1度」(1971.3.9)しようという考えをすることもあった。彼がその夢を諦めることになるのは、結婚をした1972年5月以後である。

頭に置いて場所を探しながら、商売の元手を準備するために高利貸しでお金を借りる覚悟もした(71.6.21)。しかし「軍服の再生工場をよく知っているという人と、軍服商売をしようと決心していたのに、今回聞くと、現金が半分入らないと商品を持ってこないという話(71.7.19)」を聞いて諦めたなど、資金を準備できずに水泡に消えることになった<sup>25</sup>。

そんな彼が、都市へ行き商業をして稼ごうという夢を諦めるようになる決定的な契機は、結婚であった。1971年12月、初めて見合いをした権純徳は、「2人が1つになって、人生の道を開拓(72.5.5)」する人に会い、結婚をするという考えを持ち、以後も何度も見合いをしていた。そして、近隣のウレシルマウルの李允心と見合いをした後、結婚の決心を固めた。1972年5月27日、李允心と結婚式を挙げた権純徳は、「心強い気がして、心の安定を保つことができるように」なったと結婚に対する思いを明らかにしている。

ところで彼が工場での賃金労働に対し、極度に否定的な考えを持っていたのも印象的である。仮に彼は「また、いとこが農業をするよりは、豆油工場へ働きに(71.1.28)」行かないかと誘われたのだが、断ったことがあった。また結婚以後も、何度か都市へ行きたいと考えたが、依然として工場へ行き労働をする考えにはならなかった。彼の都市生活に対する夢は、ずっと商業をして自分の生活を立てることであった。このような工場労働の忌避は、単に彼自身の生業として選択する仕事に対する否定的な考えだけには留まらない。1事例であるが、妻の李允心が一時期都市で工場労働者として就労したという事実を知った彼は、「妻が嫌になり、とても気分が憂鬱で、憂鬱な気分を我慢できずに、家内に爆発してしまった(73.2.17)」と記したことがあった。

---

<sup>25</sup> 結局、彼が夢見た都市生活は現実的で緻密な準備を経た計画であったと考え難い。実際、当時の農村で考える都市はお金が多い所、金儲けができる場所というあくまで理想的な対象であった可能性が高い。

韓国社会の産業化過程で学力・技術・資本、そして社会的資本のなかで、どれをも持つことができなかつた彼が肉体労働を忌避する理由は、工場労働に対する否定的な観念と関連したものだと考えられる。1970年代は韓国社会が重化学工業化戦略に転換する時期であったが、この部門に就職するためには一定の技術教育が必須であった。そうでない工場労働は、それこそ単純な労務職であり、もともとまともな職業を探すことが難しかった若い女性らの仕事以外は、職業自体も多くなかつた。そのため女性の工場労働は例外なく基本的に否定的な烙印の対象であり、蔑まれることとなった<sup>26</sup>。80年代に入り産業化が進化すると、これらの偏見は徐々に少なくなるのであるが、彼が離農を模索した青年時代は依然として、そのような世相ではなかつた。

しかしながら、このような過程を通して故郷に定着する彼が、農業だけに従事するのでは満足できず、また彼が生きた時期的・地域的な余件は、やはり彼を農業従事者だけに留めることはなかつた。都市進出を試みる前から彼は副業を準備したり、実際に実行に移したりしていた。養鶏業をはじめするために情報を集め、養鶏業者を探してヒヨコの飼育法を学び、実際に資金を借りてヒヨコを購入した(69.1.7; 2.7; 3.17)。またヤギを飼育する計画を立て、牧場や試験栽培所を探したり(69.1.11; 2.12; 3.1; 3.2)、牛の飼育に展望があるという話を聞いて、仔牛の購入も検討した(71.1.2)。結婚以後の彼が、家族労働の完全燃焼戦略を本格化することになったのは、このような勤勉さの自然な帰結であった。

すでに彼の結婚観に表れるように、彼にとっての結婚は、家族労働を通して生計を模索するしかない貧しい農民が、生存戦略を具体化する契機で

---

<sup>26</sup> 工場労働を「卑しい」仕事と看做す社会的視線がどこから生まれたのかについては、依然として断定し難い。しかし、重要なことは工場労働に対する否定的な社会的イメージが、労働者自らによっても内面化されたという点である。これに関しては、구해근(신광영 옮김)『한국 노동계급의 형성』창작과 비평사, 2002, 189~192쪽.

あり、またその方法でもあった。その初めの事業は、「妻の金と友人が集めてくれた金」を合わせて、20,500ウォンでクス（にゅうめん）を製造する型を購入することであった（72.7.4）<sup>27</sup>。家内手工業によってクスを製造する仕事は、主に妻の労働に依存しており、農業以外に所得を上げることのできる副業となった。そして、これは商業を通じて未来を開拓しようという権純徳の未来の構想とも、ある程度合致した。彼は都市の生活に対する未練は捨てたが、商売をして金を稼ごうという計画を依然として持っていた。

また1973年には学生を相手に、自転車店と卓球場を兼ねた商売を構想し（73.6.9）、同年8月から古物商兼自転車修理店業の許可を受けるための書類を準備した（73.8.8）。そして、金泉自転車組合（73.11.29）と金泉警察署保安課（74.4.17）に通いながら書類を提出した。それでも身元照会に遭い（73.4.23）、何回もの予備資金を費やす（73.12.2；12.5；12.19；74.1.8；1.30；3.4；4.17；4.23）などして、1974年5月4日に彼は許可証を受けることができた。彼はマウル近郊の大通りに出店し、大邱で購入した工具で店の内外部を修理した後、1974年6月8日に古物商兼自転車修理店を開業した<sup>28</sup>。主に近隣住民と学生らを対象に、自転車修理と部品販売、井戸のポンプの設置と修理などの業務を取扱っていた。おおよそ1978年まで、この店は続いたようである<sup>29</sup>。

---

<sup>27</sup> 同年7月28日、初めてクスを製造しはじめ、主にマウル住民を対象としてクスを販売した。『日記』によると、7月30日初めてクスを販売し、200ウォンの収入を得た。そして1972年12月31日、1年決算のなかで、クス販売の収入7,000ウォンを記録した後、クスに関する言及は消滅する。1973年4月5日と4月7日にクス製造業を再びはじめるために、クスの乾燥台を作り、7月30日に再びクス製造業を創業したとして記録されている。これは彼が73年3月になって、ようやく家から分家し独立世帯として生活しはじめたことと関連しているように思われる。74年9月以後、クス製造は中断するが、75年4月、再びクス販売による収入が記録されている。

<sup>28</sup> 工具の購入のための費用は、妻側の義弟から20,000ウォンを借りて充当した（74.5.20）。

<sup>29</sup> この店の収入によって、1974年9月から1975年1月まで、権純徳の店は小さいが、黒字であった。しかし1978年9月14日付『日記』に「自転車店を閉め、亀尾の住宅建設現場に通つ」としていると記録されている。



小売業店舗を開業するために、何度も保安課に通い予備資金を費やさなければならぬ状況は、開発独裁期の商業における悪弊の風景だといえる。しかしそれ以前に、彼が古物商・修理店に係わる時期、農業及び各種の副業は妻の担う役割であったという点から、それによって権純徳は店舗と農地、建設現場を勤勉に往来しながら、肉体労働だけではなく精神的な圧迫を受けなければならなかった点に着眼することが重要である。これは何よりも、小農ら特有の自己搾取的な家族労働の完全燃焼戦略の一部だという考えることができるからである。これら事例を含む小農権純徳が追求した経済的生存戦略については、章を変えて整理・叙述する。

### 3. 農民世帯の中から捉えた開発独裁期の小農の経済的生存戦略

本章と次章では、資本主義と小農社会の接合局面で中農の夢に向かって進む小農の経済的生存戦略と、それが具体的に観察される契機を検討する。一般的に小農は小規模の土地で家族労働による農作業をする農業人だと規定される。これは農民経済の生産単位が賃労働関係の欠如した家族労働農場 (family labor farm) であり、農民社会は利潤極大化ではなく家族の生計維持を経済活動の動機とすると考えるチャヤノフ (A.V. Chayanov) の立場から由来する説明であるといえる<sup>30</sup>。本章ではこのような認識に基礎を置きながら資本主義との接合局面にて、農民世帯の内部で小農的生存戦略がどのように貫徹されるのかを確認するため、『日記』の記録者である小農・権純徳の経済活動を家族労働と土地経営に区分して考察する。

---

<sup>30</sup> 안승택 『식민지 조선의 근대농법과 재래농법 : 환경과 기술의 역사인류학』 신구문화사, 2009, 392~393쪽.

### (1) 家族営農：自己搾取的超過労働と勤勉節約の極大化

結婚後も兄と同居していた権純徳夫婦は、1973年4月に分家し独立世帯を構成するようになる。分家以後の彼の家族労働の内容はより多様化し、また量も多くなる。分家当時、権純徳が引き継いだ土地は1区域600坪に過ぎなかった。分家以前には、兄と共同で他人の土地を賃借し、農業に従事していた。分家以後は、伯父とマウルの人たちの農地を賃借し農業をしたのだが、1973年に彼が賃借した農地は14<sup>マジギ</sup>斗落（2,800坪、約0.9ha）であった（1973.6.5）。1970年代初頭の韓国農民の1世帯当たりの平均耕地面積が1ha未満であったのを勘案すると、当時の農業生産力の水準から権純徳夫婦の家族労働として耕作することができた耕地面積の規模は、韓国農民の平均程度であったと考えられる。

しかし『日記』で自ら明らかにしたように、「土地を掘って…金儲けしようと思っても、顔の汗のしづくほどの価格にもならない（1973.6.14）」とし、権純徳夫婦は所得を増やすために様々な分業をしなければいけなかった。彼が他人の土地を借りて農業をしながらも、一方では古物商を開業して自転車修理をして、仕事があれば躊躇することなく肉体労働の場へ行き、現金収入を得たという点や、妻・李允心が分家以後にククス製造業を本格的にはじめたことなどは、先述した通りである。それだけでなく、李允心は1女を出産（73.4.20）後、7日間休んだだけで、すぐにククス製造業を再開した。また当時の農村女性の主要な所得活動中の1つであった、絹の絞り染め作業（「おび作業」）にも並行して従事していた（73.4.11；12.16；74.1.15）。

権純徳夫婦が所得を上げるために、身体を省みず猛烈に仕事をするスタイルであったのは明らかである。結婚以来、彼らは農業と商業、建設労働とその他日雇いの副業など、あらゆる領域を往来しながら、生計活動を展開していた。そして1970年代中盤から農業の機械化が徐々に進展すると、夫婦は家族労働でやりくりできる作業と、耕地面積をそれに合わせて増加

させることで対応した。彼が初めて機械を利用して行った農作業は、1973年10月の稲の脱穀であった。その日の『日記』で権純徳は、「初めて稲の脱穀をしてみて、気持ちよくなった」とし、昨年まで足で踏んで脱穀をしていたのに、「モーターですと気持ちよくでき、汗1滴を流すことなく、稲の脱穀をしたので気分がいい(73.10.26)」と感想を記している。

続いて彼は、1975年に高圧噴霧機を利用して、農薬を散布した(75.8.17)。そして、1974年に統一稲(74.5.5)、1976年に維新稲(76.4.15)などの新品種の稲を導入しながら保温苗代を設置し、1978年にはビニールハウスを作りマクワウリの栽培をはじめた(78.2.13)。1980年にはコンバインで稲刈り作業を行い(80.9.30)、バインダーで稲を束ねた(80.10.5)。1981年には田植え機を利用しての田植えの作業を眺めながら、「とても楽になりそうだ(81.4.12)」と感想を残している。また同年から、管井掘り〔管井は地下水を利用した水利施設〕作業が本格化し(81.6.11)、田の農作業での水不足問題を、ある程度解決できるようになった。そして1990年には政府から50%の補助を受けて、トラクターを購入した(90.3.27;90.3.31)。

機械化の力を借りながらも家族労働で対応できる耕地面積が増加すると、権純徳家族の耕地面積は徐々に増えていった。1973年に14斗落だった耕作面積は、1979年には20斗落(4,000坪、約1.3ha)に増加し(79.4.14)、1980年には30斗落(6,000坪、2.0ha)になった。そして1991年の『日記』(91.5.26)には、「私の農業が43斗落(8,600坪、約2.7ha)」であると記録し、1995年には「我々夫婦が働くのは56斗落にも」なると記している(95.5.25)。しかし、機械化の進展で家族労働が対応できる耕地面積を広げることができたととしても、権純徳夫婦の労働はいつもその範囲を超えるものであった。金泉一帯でもっとも平野が広い地域だという点と、農村労働力の不足が深刻になったという点は、権純徳夫婦が小作地を広げる際、非常に有利な条件となった。

一方、権純徳自らも筆者らとのインタビューで、自身が生活基盤を築く

ことができたのは、亀尾・金泉の肉体労働現場で現金を稼ぐことができたからだと言わしむように<sup>31</sup>、隣接する亀尾の都市建設事業が彼の人生の重要な転換点となった<sup>32</sup>。亀尾で住宅建設が本格化すると、彼は自転車店を廃業し建設現場へ行きはじめた。農村では1年間働いて20万ウォンから30万ウォンを得る程度だが、「亀尾の住宅のおかげで、財がない人も基盤を築くことのできる時だと考える。自身も1日の稼ぎが4,000ウォンになり、大きな稼ぎ（78.9.14）」だという判断のもと、彼は農業を続けながら農閑期を利用して肉体労働をはじめた。亀尾で職を探すことができないと、金泉の平和市場の新築工場の現場（79.2.27）へ出向き、小規模の個人住宅の工事現場へも出向いた（79.3.4）。彼の労働は亀尾のアパートの雑夫の仕事（1979.12.6）とアパート建設現場（1980.11.5）、精油所の建設現場（82.11.19）、倭館市場の建設現場（80.9.16）、工場の管理人夫（84.11.11）など、場所を選ぶことなく1985年まで続けた。そのような労働の結果、彼は1975年に初めて他の人に長利米・高利債を貸すことができるようになった（75.9.1；12.21）。

権純徳のこのような都市での賃労働が増加するのに伴って、農作業と家事に関連する妻の負担は大幅に増加していった。そして結果として、田畑の農作業の男女分担などの伝統的な性別労働分業は、権純徳夫婦の生活世界には存在しないものと同じとなった。田では春に苗床を作り田植えをする仕事から、草取り・稲刈りまでも夫婦の労働に区分はなかった。畑では小麦を収穫し（83.6.19）、大麦を刈る作業（6.6）なども夫婦共同で行った。特に5月になると、妻は一帯の主産物である果樹の花の摘み取り作業の賃仕事に頻繁に従事した（83.5.12；83.5.16）。畑の管理も夫婦ともにしたが、

---

<sup>31</sup> 金泉・権純徳家、訪問インタビュー、2014.4.3.

<sup>32</sup> 1969年から開始する亀尾電子産業団地建設は、亀尾市の成長の足場となった。亀尾は1977年に産業基地開発区域に指定され、1978年に善山郡亀尾邑が亀尾市に昇格した。権純徳が亀尾の建設現場へ行き、現金収入を得るようになったのは、この時期からである。

唐辛子畑の草取り（83.5.16）から、各種野菜栽培の作業に、時間があれば夫婦ともに協力した<sup>33</sup>。農作業の労働量は、『日記』に記録されているように、「2人で骨が砕けるようにやったと思う（83.9.16）」ほどであった<sup>34</sup>。

また冬には夫婦で裏山へ上り木を切ったが、その後、切っておいた木を整理する仕事は妻の役目であった（83.1.1-1.14；83.2.25；2.27）。それだけでなく、妻は山で木材を背負って降りてくる仕事も担っていた（83.1.17）。また権純徳は冬の農閑期に建設工事現場で仕事をするため、1983年11月に妻に「今年の冬にはどんなことがあっても、耕耘機と自転車をみな教えてしまう（83.11.23）」と決心し、耕耘機の運転を教えた。そして「家内が、このマウルの女性のなかで、初めて耕耘機を覚えたこと（83.12.13）」になるとし、満足だったと記していた。また妻の李允心は、少しでも現金収入を増やそうとし、果物や野菜を持って直接亀尾市場へ行き販売もしたが（84.1.11など）、これは妻だけの仕事であった。それ以外の肥料や農薬の散布なども、すべて家族共同の労働として処理した。

韓国の農村で女性労働が副次的・補助労働の地位から、男性労働を代替する労働に転換しはじめたのは1970年代初頭からである。それ以前までは男女別の性別労働分業が比較的厳格に守られていた。1960年代後半から農村人口が急激に減少しはじめるのに比べ、農業機械化の速度は相対的に遅滞したせいで農村での労働力不足が深刻な問題になった。このような原因により、女性労働力は男性労働力を代替しなければならなかった。結果的にこれは、農村の女性労働の負担強化と伝統的性別分業の解体へと繋がっ

---

<sup>33</sup> 例として、1983年の1年間、権純徳夫婦は牛を2頭と仔牛2頭を飼育した（1983.4.1；1983.7.1）。大麦と小麦、稲の農作業をして、果樹の仕事として、リンゴ、桃、スモモを収穫し、1990年以降にはぶどう畑を栽培した。畑の仕事としては、ニンニク、唐辛子、緑豆、じゃがいも、豆、ゴマ、さつまいも、白菜、ネギ、ニンジン、大根、ほうれん草など、野菜の品目を選ぶことなく栽培した。

<sup>34</sup> 夫婦の労働量を見定める記録として、「昨年には40斗分の田を、（夫婦が）手でみなしたが（1983.10.3）」などがある。

た<sup>35</sup>。しかし、家族労働を基盤にする生存戦略で女性労働は、男性家長の所得活動に合わせて所得増大活動に投入されたという特徴を持つ<sup>36</sup>。

このように、移動可能な家族労働の完全燃焼のため、權純徳は勤勉と節約のイデオロギーを極限まで推し進めることとなる。彼の生活は基本的に猛烈ともいえる程の節約を特徴としており、「使わないことは残ること」という態度で初志一貫をしている。それだけでなく、農村はもちろん韓国社会全体で社会生活の基本といえる相互扶助の義務についても、何とか目をそらそうとする姿を表している。両親の祭事を除いて、費用がかかりそうな儀礼の場を避けたり、家族や知人、妻の実家の慶弔事でも支出をせず、申し訳ない心情を言葉で表現することで終わったりという事例が、日記の随所で登場する。さらには申し訳なさを日記に記録しながらも、妻のためのお金は、可能な限り支出しようとし<sup>37</sup>ない。これは結局、「成功しようという野望」とその「基盤の欠乏」の間で両立不可能な乖離を感じた農民が、機械化・大規模化・資本集約化などの農業の資本主義化の局面でも、勤勉節約と耐乏、家族労働の増投に基盤する労働集約化などの小農社会特有の伝統的生活様式とイデオロギーを、持続的にそして現代的に強化させていく姿だといえる。

---

<sup>35</sup> 이지은 「오늘의 농촌여성」 『창작과 비평』 14(2), 1979, 54~57쪽.

<sup>36</sup> 케롤라인모저・케이트영 「가난한 노동자들 속의 여성」 이효재・허석렬 편 『제3세계의 도시화와 빈곤』 한길사, 1983, 363쪽. このような点から、權純徳夫婦の労働は家族戦略を構成する主体と、実際の行為する主体間の分離（박주희 「주민주도형 농촌 마을 만들기에서 여성의 노동에 대한 연구」 『농촌사회』 19(2), 2009, 207쪽）が明確だったといえる。実際に研究者らとのインタビューで、權純徳は当時の妻に「私だけ信じて、付いて来い。私がしろとする通りにすればいい」と力説したと回顧した。

<sup>37</sup> 權純徳は自身が基盤を確立する「1978年以前には、家庭外では、（慶弔事に）参加をしないと決心」をし、マウルの人々の結婚式にも行かなかった（76. 1. 2）。しかし、1980年代にも彼は「今日は故・母の70歳の誕生日なのに、何もできずに参席もしないので、申し訳なくて仕方がない。今年は母の誕生日には必ず豚1頭を捧げようと思ったが（84. 4. 10）」、「明日は家内の誕生日だが、肉1斤も買わず、誕生日を迎えることになって（…）家内に申し訳ない感、言葉にできない（83. 10. 1）」などの極端な耐乏を実践する。

## (2) 土地経営：中農になろうという欲望と土地に対する執着

前章で言及したように、権純徳は農業だけでは経済的基盤の確保が難しいという語りを信念のように繰り返している。「現在の韓国の実情を考えれば、誰が政策をしても農民が公正に生きられない (69.1.28)」という判断で、都市へ行くためにもがき、結局農村に定着しようと決心をしても、商売や工事現場での肉体労働をしながらも、「土地を売って、金儲けする人は愚かな人だ (73.6.14)」という考えを捨てることはなかった。

ところで彼の経済活動は驚くべきことに、結婚以降に土地を得たいという欲望に繋がっていった。「人々は土地を買うと宣言するのだが、自分は未来を見越すことができず、心だけおかしくなるんだな (75.12.7)」、「自身も田もう1斗あれば、いずれ金持ちになるんだろうが、田200坪がこんなに疲れるのか (75.12.27)」などの記録が目にとまる。彼の店は、1975年から黒字を記録しはじめる。その年の年末決算を見ると、「年末総収入金額計443,230ウォン、年末総支出金額計403,874ウォン (75.12.31)」と、1年間に3万ウォンの黒字を出したように記録されている<sup>38</sup>。即ち、彼は農業外の所得を通じて金を集めながら、逆説的にも農地所有に対し切望しはじめたのである。

一時期、農業を放棄しようとした彼の内部で、このような土地に対する熱望が再燃したのは、一次的には彼自身が貧しい小作農であったという事実と関連があるだろう。彼の日記の至る所で、学校に通えず友人の家の土地を小作する20代青年の恥じらいや自愧感 (69.6.11 ; 11.6) が、色濃く刻印されている。また他人の農作業をしても、結局は他人にとって都合のいい仕事だけをさせられるという悔しさ (73.6.5) も少なくなかった。そこで毎年「どんな仕事があっても、他人の仕事はしないと決心 (74.4.30)」

---

<sup>38</sup> この収入の相当部分は農業所得ではなく、商業と賃金労働の収入のようである。農業所得がなかったその年の1月にも、9,000ウォン近くの黒字を記録しているからである。

をするが、それでも常に他の方法は存在しなかった。

これと合わせて、彼の土地所有への熱望には、1970年代の不動産価格の暴騰が大きな刺激になっていた。1975年、彼は『日記』に「人が少しでも、その後を予想することができるなら、すでに金持ちになっているはずなのに、その後を予想することができないので、金持ちになれないでいる。(3年前でも1段地600坪に) 20万ウォンを出せば買うことができたのに、最近では上田250万ウォンと、どんなに値上がりしたのか。金持ちは、土地が多い人が金持ちだ(75.12.7)」と記している。類似した状況は『平澤大谷日記』の記録を通して確認できる。日記の主人公の申権植は、<sup>アサン</sup>牙山湾の開発計画が発表された1974年、「土地ブローカーが、犬が歩き回るように宣伝するので、欲が大きくなった(74.2.2)」と記録を残して以来、田畑や林野の購入が持続的・積極的に関心を示していた。そして、1979年には初めて投資目的の農地を200万ウォンで購入し、7ヶ月後に353万ウォンで転売し、1984年には子供の居住を目的に1968年に購入したソウル高尺洞の家屋を売り、やはり純粋な投資目的に京畿道富川<sup>フチョン</sup>の7家屋を購入した(84.2.20~5.21; 12.31)<sup>39</sup>。この時期、中農規模の土地所有を志向する小農の夢には、長期持続的で歴史的な要因の他に、このように農村に居住しながらも農業をほとんど放棄してしまった農民にまで、同時代の社会構造的現実が土地所有を強制したことに現れているように、極めて現代的な要因が存在していた<sup>40</sup>。農村に居住しながらも農業をほとんど放棄してしまった権純徳のような農民にまで、同時期の社会構造的現実が土地所有の欲望を強制したといえるだろう。

<sup>39</sup> 지역문화연구소 편 『평택 일기로 본 농촌생활사Ⅱ : 평택 대곡일기 (1974-1990)』 경기문화재단, 2008, 55쪽.

<sup>40</sup> 彼が経済的困難と不透明な展望のなかでも、1980年1月、自身が50万ウォンで借りして住んでいた家を購入したこと(1979.12.31 契約、1980.1.14 購入)は、その頂点であったといえる。



再び權純徳の『日記』の内容に戻る。毎年土地を買い入れることを計画として立てていた彼は、1979年に初めて土地を購入した。「友人の紹介で奉奮〔天水奮〕<sup>41</sup>の田562坪」を170万ウォンで買い入れ、友人らに「酒と鶏2羽を出し、今日は気分が良くて、出せというのなら、いくらでも出すだろう(79.1.20)」と喜んだ。そして、翌年には賃借して住んでいた家を50万ウォンで購入した(80.1.14)。1986年にはマウル前の要地であった堂山麓<sup>タンサン</sup>地の田600坪と4カ所の庭地を、それぞれ坪当たり7,500ウォンと10,200ウォンで買い入れた。その日の『日記』に、彼は「今年は本当に自分にとって楽しい1年(86.1.1)」と記している<sup>42</sup>。このように、權純徳は自身と妻の労働によって稼いだ収入の大部分を農地購入に投資しながら、徐々に中農になる夢を実現させていった。

#### 4. 農民世帯の外から見た開発独裁期の小農の経済的生存戦略

前章ではチャヤーノフ流の認識に基礎しながら、農民世帯単位の小農経済の特性が資本主義との接合局面で、どのように観察され変形されるかを考察した。しかしチャヤーノフ流の小農認識は、家族労働と小土地経営などの農民世帯という生産単位の内部関係だけを指摘しており、様々な生産単位間の関係、例えば階級間関係・国家経済との関係などを、家族農運営に対する外部的なものとして看做すことで、農民経済を社会的生産過程の総体的関係のなかで把握するのに失敗したという批判を受けている<sup>43</sup>。こ

<sup>41</sup> 読者の理解を助けるため、馴染みのない用語の後ろに説明を付す場合、[ ] 内にそれを記すことにする。〔訳者注〕「奮」は朝鮮の国字で「水田」の意味。

<sup>42</sup> この喜びは、1979年初めて奉奮〔天水奮〕田を購入した時と合わせて、「2回目の喜びを迎えた(86.1.1)」と表現している。研究者らとの面談で、權純徳は1979年以降、計8回、農地を購入したと説明したことがある。

<sup>43</sup> 오명석 「농민의 '전통' 과 '근대성' : 말레이 농민의 경제와 문화를 중심으로」 내산 한상복 교수 정년기념논문집 『한국문화인류학의 이론과 실천』 소화, 2000, 702쪽.

れと関連してウルフは、食料耕作者一般と農民を区分することが国家機構による生産過程の統合であり、自身と階層が他の権力者の要求と制裁にしたがう場合こそが、真正な意味の農民であるといえると記している<sup>44</sup>。これを念頭に置くならば、小農経済の運用と関連して、国家機構およびそれを含む外部世界と農民を統合する集団関係網の結節地点としての共同体に対する考察を無視することはできない。本章ではこのような問題意識によって『日記』中の権純徳の生存戦略を、マウル共同体と国家機構の2つの次元とを関連させて整理する。

### (1) マウル共同体：社会的認定と経済力拡大の競争的相乗

マウルで生きていくことは、互いに借りを与えたり、分担したりしながら相互に結合することで、変動することのない「借りの共同体」を作っていくことであるといえる<sup>45</sup>。ならば、権純徳のような慶弔事の相互扶助的義務も可能な限り避けようとする気質を持つ人物に、その社会性の維持と関連して巨大な困難が生じることは、容易に想像することができる。実際に権純徳は普段の生活で、できるだけ借りを持つことなく生きていこうとする気質を強く示し、『日記』でも負債や掛け売りに関連する記録が現れることは多くない<sup>46</sup>。そうであるなら、彼の節約と耐乏を通した小農的な経済戦略の極大化は、マウル内外での社会関係の維持とどんな関連を持つ

<sup>44</sup> 에릭 R. 울프 저, 박현수 역 『농민』 청년사, 1978, 27쪽.

<sup>45</sup> 이성호·안승택 「1970~80년대 농촌사회의 금전거래와 신용체계의 변화: 『창평일기』를 중심으로」 『비교문화연구』 22(1), 2016, 28쪽.

<sup>46</sup> 1986年に堂山の土地を買い入れるために、彼は農協で250万ウォンの融資を受けたり(86. 1. 13)、約20日後に「土地をかうんだと、借金した一切を返して、借金は1つも無いが、使う金は少ない(86. 2. 1)」ようだと記している。彼は筆者とのインタビューで、田植え機、耕耘機、トラクターなどの農機械の購入資金について、政府補助金と融資金の他に、農協で金を借りたことはないといった。さらに、農協から農地購入資金や畜産資金が使えたと連絡された際も、「恐ろしくて」使えず、「今考えれば本当にバカなこと」だったと述懐している。

たのだろうか。

まず彼の日記で耐乏と節約を誓う叙述は、彼を取り巻いて起こる事態の展開様相と頻繁に衝突していたことが確認できる。マウルの慶弔事に対する不参加を誓うが、これは基本的に扶助の代わりに言葉で了解を得ることのできる、近いといっても非常に近親ではない、その場の社会生活に大きな不利を及ぼさない程度のある親族（例えば妻の実家）に対してなされる場合が多かった。また賭博や賭け事の場に関わらないようにという日記中の誓いは、おおよそそんな場を往来してきた日に記録される傾向があり、そうした誓いにもかかわらず、数日間の内に再びそのような場へ行くということも多かった。

特にセマウル事業などのマウルの共同賦役には、「食べ物もなく、住宅だけきちんとすれば、生きていけるのか（72.3.19）」という不満を抱きつつも参加した。道路開設（73.9.26）、セマウル倉庫建設（74.2.22；3.3など）、共同洗濯場作業（74.3.19）、農路建設（76.3.23）、砂防事業（76.4.18）、造林事業（83.8.13）など、共同賦役に住民らが随時動員され、時にそのせいで農作業や所得活動に支障をきたすこともあったが、マウルの人々には「申し訳なくて（75.8.5）」抜けるのは難しかった。

何より重要なことは、男女間の性別分業構図の無力化は主に家族の生計労働の領域から起こり、特に従来女性の仕事であった労働を夫婦が共にするようになったり、従来男性の仕事であった労働を妻が一人で、または夫婦そろってするようになる場合が多いという点である。換言するならば、従来女性の固有領域である労働を男性が一人ですることは、ほとんどなかった。また同様に『日記』で、一方で、夫婦間で伝統的な性別労働分業がほぼ無化されているにもかかわらず、もう一方で建設現場の肉体力労働や水利施設の堰を修築する仕事や村落の道を平らにする仕事のようなマウルの共同の労働は、『日記』の全体時期にわたって男性の仕事として残っていた。これは夫婦間での伝統的性別労働分業構図の破壊が無計画に進められたの

ではなく、依然として「社会的体面」のようなものを念頭に置きながら行われたことを物語る。結局、水利組織や村落自治組織の構成員としての義務や権限の行事に該当するこれらの作業は、男女誰でも行っていい単純な共同作業ではなく、おそらく労働力の社会的・物理的特性の両方を勘案するなかで、各家族を代表する男性家長らの仕事として存在していたことになる。

性別分業構図の破壊が、労働力の投入量を強制的に極大化するためになされたことである限り、それを極度に追求する権純徳家族の場合も、その破壊は世帯経済内のものとして限定されていた。実際には口外しないまでも、『日記』で彼が何度も妻に申し訳なく思っていたことも、実はこの性別分業構図の破壊が、女性の他の社会的権威に対する認識とともに進まないという点を、本人自らが本能的に悟った結果であるだろう。その一方で、『日記』中の権純徳が社会的相互扶助の義務を避けようとする記録の裏面で、実生活の権純徳がマウルで青年会長<sup>47</sup>や水利契の監考(91.4.12)のような公式的職務を担っていたことは、彼がこのような社会的役割を自分なりの方法で見事に遂行していたことを意味する。つまり農業の資本主義化の局面で小農社会的な生活様式とイデオロギーを極大化させることは、依然としてマウル共同体のような社会集団の視線を意識しながら、そのなかで可能となるものであった。

このように権純徳の経済的生存戦略が社会的視線を意識し、それを前に展開していたという点を念頭に置き『日記』を再読する場合、もっとも目につくものは耕作地確保のための夫婦の努力である。前節で言及したように、実は『日記』で権純徳夫婦は技術的手段の発展に伴って耕作面積拡大の過程で、常に動員可能な家族労働の完全燃焼が行われる度に、それ以上

---

<sup>47</sup> 権純徳は1972年、マウル青年会の副会長(72.8.15)、翌年には青年会会長(73.1.1)を歴任している(74.1.1)。

の規模の耕作地を確保しようとする姿が観察される。そしてその背後に権純徳は、可能な限り広大な小作地を確保するためには、マウルで一番に有能で勤勉に働く労働力であるという点を、村の人々に見せつける必要があることを意識して、またそのことを記録していた。

換言するならば、賃借を通じた耕作面積の拡大のためには、自身の家族労働力に対するマウルでの高い社会的評価が必要であり、それらを引き付けるためには、常に必要とされ、かつ可能な範囲をこえた超過労働が不可避であった。青年会や水利系の役員などの社会的職務を立派に遂行する青年であるという評価は、やはりこの耕作地拡大の企画に附合するのは明らかであった。そしてその結果として、この超過労働の企画が成功し、その過程で得られた耕地面積拡大は、再び「追加的な超過労働」を要求するようになる。マウルの視線を意識する小農社会内の各家族の前に、競争的相乗が繰り返される無限の正のフィードバック（正帰還；positive feedback）の空間が出現することになったのである。

この事実は、再び本章の冒頭で論じた問題、つまり農業によっては経済的基盤を確保するのが難しいという『日記』で繰り返される記録にもかかわらず、彼が結婚後すぐに土地を購入しようとしたことに対する、また別の社会的背景を指し示している。マウルで定着して生きていく以上、土地を持たず小作営農者として残っているのは、まともな社会的待遇を受けることもできず、一人前の働きをすることも困難であるだけでなく、賃借を通じた耕作地拡大などの経済的機会の確保も難しかった。これが小農社会的な共同体文化の一端でもある。

そしてこの過程に一度でも参入すると、マウル共同体内で展開する絶え間ない正のフィードバックによる経済的な相乗の場に組みこまれながら、超過労働と名声拡大と耕地拡大とが絡まり合いながら続く、小農社会的労働と土地倫理が発動することとなった。農村に残るか、都市へ行くか、その選択は偶然であったり、個人的な要因が介在したりなど、それこそが微

細な差異に分かれていた。しかし、一度選択が行われた後、無限の競争的上昇の空間へ入り込むと、微細な差異が生む経済戦略の決定に関連した波及効果として、取り返しのつかない格差が生じるようになったのである。

ところで開発独裁期の農村で資本主義と小農社会の結合の様相を検討する際に、小農間の経済的な上昇だけに言及するのは一面的であり、よってこの点に留まる限り、間違った認識に繋がる恐れがある。そうした経済的上昇の絶え間ない正のフィードバックが構成されるのであれば、小農社会はまた平等であるべきだったからである。開発独裁体制下の農村で小ブルジョアになる道は、大きく3つの道が存在していた。(1) 経済的な圧縮成長の過程で、都市 - 農村格差が深化していない比較的初期の局面において、農村の土地を売却し都市の土地を購入することで、都市型の資産を持った農村型の資産家になる道。(2) 教育・就職などの部分的な離農を通じた世代移動によって子どもを都市に定着させ、彼らの経済力を土台として農村で資産を集積する道。そして(3) 権純徳が選んだ道のように、自己搾取的な家族労働を通して耕地を増やし、土地所有を拡大する道である<sup>48</sup>。ところで(1)と(2)も一定程度そうであるが、小農社会内の平等は、特に(3)の経路が発動するためには、不可欠な社会経済的な前提となった。何故だろうか。

「死ぬように」働くことで余剰生産物の獲得が可能になり、それを基礎に土地を広げていくことができるとしようとするならば、まずどんな土地独占も存在してはいけなかった。もちろん解放以後の農地改革の実施により、その後再び流動性が增大する状態ではあったものの、韓国社会でこの障害は基本的に撤廃されていた。合わせて重要なことは、農民間に資本財(農地賃借や営農資金の貸出能力まで含む、すべての使用可能な生産手段と投下資本量)

---

<sup>48</sup> もちろん、この(1)～(3)の経路の区分は理念型的なものであり、実際の個人の生活で出現するパターンは、この中の2～3種が重なりうる。

規模の差異が大きくなり、差異があったとしても、その差異による生産性の差異が大きいものであってはならないという点である。家族労働力の増投による余剰生産物の獲得を可能にしようとするならば、合わせて競争的上昇（正のフィードバック）の場に存在する小農間において、特定世帯の労働力の増投が、資本財の規模による差異より（または、それに劣らないように）意味のある差異を作り出す必要がある。権純徳が故郷へ帰り、そこでの定着を決意した時期は、幸運にも勤儉と節約、耐乏による儉約家になるという経済的な生存戦略が有効なものになりうる程度に、農民間に動員可能な資本財の規模の差異が大きくなり、その差異が作り出す生産性の差異も相変わらず決定的なものにはならなかった。そして故郷への定着後に上の

（3）の道を進むやいなや、そうした差異がより決定的なものに変わりはじめた。このような点より、権純徳は努力した人物というだけでなく、世代的に運もそれなりに悪くなかった事例であったといえる。

## （2）国家機構：「順応」と「不信」間の動揺

ここまででは、1970～80年代の農村で進行した下向標準化を軸にする中農標準化の過程で、権純徳夫婦が中農として生き残りに成功するために発揮した、個人的／家族的努力の側面を主に扱ってきた。しかし、その過程では彼の血と汗のにじむような自己搾取的な超過労働のような努力の他に、努力に還元しえない外部的要因が介在したという点も明らかである。これは単純に「外部要因の介在」という表現だけでは不足しており、「国家依存的営農」であるとまで言えるものである。

事例として何よりも重要なことは、権純徳と妻の労働力によって担いられる範囲で耕地面積を思う存分拡張できるようにしてくれた農業の機械化の恩恵を、国家の支援と補助が提供していたという点から探ることができよう。「借金を恐れた」と彼が語るように、一小農が躊躇いもなく国家補助金を申請し農協で融資を受けたのも、田植機、耕耘機、トラクター

などの機械を購入するためであった。これを元手に、彼は1970年代初頭に3千坪にも満たない耕地面積を、1990年代には1万坪程度に拡大させることができた。

また権純徳が生計維持と経済力拡大の決定的な資源と考えた都市化・産業化建設現場の労働は、やはり国家的開発計画の一環として進められたものであったという点も、再び想起されなければならない。このことが、貧農出身である彼が、うまく中農化の道を進んだ小農として、有利な時期的・地域的・個人的な要因を十分に発揮することのできる背景となったことは、前章で確認した通りである。

何よりも権純徳は、将来有望な農業作目や副業種目とその栽培と飼育などの技術に関連した情報の収集にも没頭していた。このため彼は、養鶏と畜産、果樹と野菜の栽培など、すべての農産物の種目にわたって、大部分の情報を近隣に居住する経験者と、政府機関の情報・技術の提供に依存した。この過程で彼は、特に新品種の稲や、その栽培法を普及する農業技術教育などにも毎回参加していた（81. 1. 31；83. 2. 1；83. 2. 24；84. 1. 16）。

このような小農的生存戦略としての国家依存的な営農行為がもたらす政治的帰結は、二つの方向性を同時に持つものであった。一つは、それこそ国家政策に順応する「従順な農民」になることであった。京釜高速道路や亀尾工業団地・亀尾市の建設などの国策開発事業、そして農地・道路・住宅・共同施設の改良と、農村の副業の強化に代表されるセマウル運動と、農村近代化などの農村開発事業は、農民にとって現金所得を得ることのできる職業や、農閑期の所得源になっていた。そして、これに伴う現象として、浪費や虚礼虚飾の根絶、陽暦正月と陰暦正月という二重過歳慣行の批判、共同体生活のための諸般の慣習と規律の再整備など、開発独裁国家が推進する日常生活文化水準での道徳的指導についても、権純徳は従順であるだけでなく、ほぼそれを自身の成功指針であり人生観として看做していた。



一方、このような「従順な農民」になる道は、国家政策と官僚に対する不信と不満を持つ「不穏な農民」になる道でもあった。権純徳に現金獲得の機会を提供した都市化・産業化政策は、その一方で都市 - 農村間の格差を拡大させていき、彼は多忙な日常と営農生活について、往々にして寂れた農村生活と対比される都市での安楽で華麗な生活の様子をぼんやりと眺め、この格差がどこから由来するのかについて問うた<sup>49</sup>。またセマウル運動や予備軍訓練で代表的に現れる、強制的な軍隊式動員や国家政策を執行する公務員の権威主義と不正腐敗に対しても、権純徳は背ことなく批判的な認識を表していた（74. 4. 9；74. 6. 12；80. 12. 25；81. 5. 10；85. 7. 4）。

そして決定的な点として、権純徳が依存してきた国家機構の農業・畜産技術指導は、農村の実情に合致していないだけでなく、技術的にも未完成なものを農民たちに強制的に推奨するのが常で、農民らの不満の対象となっていた（84. 5. 6；85. 4. 9）。例えば権純徳の畜産に対する投資は、常に政府の推奨と支援・教育・品種・技術普及、そして彼の周辺の援助と情報を通して行われた。これによって彼は時に経済的利益を得ることもあったが、大部分は大きな安定的な利益を得られないままで断念して終わっていた。畜産産業は零細農が行うには比較的大きな資本を要する事業であったが、権純徳は迷いつつも資金を準備するが、遅れて参入したため時を逃したり、ようやく投資に成功した事業が当初想定していない災害に遭い、耐え難い過剰投資の弊害を経験しなければいけなかった。

農業技術の普及もやはり同様であった。統一稲（72. 10. 17；73. 9. 15）、維新稲（76. 10. 4）、曙光稲（81. 9. 29）などの政府で強制的に勧奨する新品種は、いつも農村の実情に合わず失敗に帰結していた。該当品種の導入自体だけ

---

<sup>49</sup> 例であるが、1979年に亀尾市庁アパートの雑夫の仕事をしていた権純徳は、市庁の公務員の妻たちの楽な生活を眺め、「若い女性らが農村に嫁ごうとしないことが、十分に理解できた（1979. 12. 6）」と記している。

を見て国家政策を評価するならば、中長期的に成功したと言えるとしても、それを耕作する現実の農民の立場に立ってみれば、導入した数年の失敗だけでも経済的に大きな打撃を受けることになった。よって、それら証明されていない新技術を強制的に普及しようとする政府の政策は、非常に大きな不満の対象となったのである。権純徳は新品種が普及されるたびに心配と不信を抱えながらも、強制的な雰囲気の下で不安で従わずにはいられなかった。しかし、実際に従った後には、毎年のように「八字パルチヤ〔四柱八字。持って生まれた運命〕を改めると言われても、もうやらない（81. 4. 13）」という決心を繰り返していた。

そうであるならば、この従順する農民と不満がみなぎる農民との間で、小農・権純徳が地位を築くようになる現実的な姿は、どのようなものであったのか。それは国家が提供する「公信力のある」情報によって、何度も失敗を味わいながらも、それに依存しなければ他に依存する場所がなく、「より公信力のある」情報を渴望する、即ち「文句をいいながらも従っていく」姿であったといえる。また、その「従っていく」後に残されているものは、「いつも支援が不足し、そのくせ農民を犠牲にしてばかりいるように感じられる」政府の政策に対する不満であった。しかし不満を抱きながらも、農民たちには頼れる場所が国家しかなかった。同質的な小農らが慎ましく生きていく、開発独裁国家の下での平等であるが、実際の機会は極めて制約されていた。つまりそれは、国家機構とのパイプの太い人だけがその機会を得ることができた、小農社会が持つ基本的な限界であった。

開発独裁国家によって強制された順応と不穏の間で、小農が動揺するしかないという点は、実のところ常識的なことでもある。ところで、この常識的な地点に対する歴史的評価に関連して我々がよく見逃している重要な問題は、開発独裁期を経て農村に残る小農たちが、従順であったり不穏であったり、また他のどんなものであっても、彼らが前章で区分した（3）の経路を辿った末に生き残った生存者であるということである。したがっ

て彼らは与えられた生計の機会を巡って起きた競争で、ある程度の成果を納めた集団という点である。もちろん、韓国社会全体の社会構造的な変動によって、その競争の戦利品が何の値打ちのないものになってしまったことは、一般的によく知られた通りである。

それにもかかわらず、彼らが(3)の経路の生存者であり、成果集団であるという事実は、開発独裁期の農村で進行する資本主義と小農社会の接合に対する歴史的評価において、見過ごすことができない点である。順応と不穏の間で後者に傾くしかない、その経路内の競争の敗北者・離脱者や、牙浦邑の権純徳ほどに時期的・地域的・個人的利点を享受できなかった者は、いずれにしても結局のところ農村での生存者ではなく、早かれ遅かれ都市へ移住するしかない者であった。また都市での生活が思っていたほどに満足できないとしても、再び故郷に戻ることもできなかった。

しかしながら、だからといって農村で生き残った生存者がただ単に順応一辺倒であったと考えてはならない。開発独裁期自体については、依然としてその最終的な帰結がはっきりしていない時期として記憶されているので、不満が露骨化はしていないが、結果的に彼らが持ったのは、国家の農業・農民・農村政策に対する批判的な認識だったからである。この批判的認識には二つの次元が存在する。一つ目は、農民も今や国家の農業政策が持つ反農民的・親資本的な意図を把握できるようになったという点である。これは結局、農民らは国家が持った道徳的優位性を認めないことに帰結する。二つ目は、国家の技術普及を全般的に信頼しなくなったという点である。即ち、彼らのような農村の生存者らは、国家の技術的な優位性もまた信じない。

この二点の不信が、開発独裁国家の反農民的・親資本的性格に対する感覚的に見抜くことであるなら、この批判的知覚自体が、開発独裁期の農村で小農としてうまく生存しえたことがもたらした最大の戦利品だと見なすことができる。それにもかかわらず、彼らが開発独裁期を美しく記憶する

理由として、その時期は彼らが家族とマウルと国家の構成員として成功する経済的膨張を成し遂げた時期であり、また農村で生き残ることができた時期であったためだからだろう。

2010年代の農民・権純徳は依然として農業をしているが、自己搾取的な家族労働から引退してから、かなり経っている。子どもたちは都市に定着している。そして妻とともに金泉市内でギター演奏とヨガ講習などに参加しながら、これまで犠牲となった妻のために余生を送ることにした<sup>50</sup>。ようやく、韓国の市場経済体制で彼は成功した現代人になったのである。

## 5. 結論：開発独裁期の農村での「生存という成功」

現代農村の生活日記に向き合う際、研究者がその研究底辺において持っ  
てしまいやすい視線は、資本主義的産業化と構造改革の過程で犠牲になっ  
た「被害者」として農民を捉えることである。人民主義やマルクス主義の  
歴史観の展開とも密接に関連し、そこからその基礎を得たこの視線自体は、  
事実、間違っただけでもなく、特定の視線を持つこと自体が間違っただけ  
というわけでもない。ところが、生活日記が、その「被害者」の実存的状  
況を個人として記録したものだと考えた場合、誤解の素地が介在するよう  
になる。農村で生活しながら、長期間、日記を書いてきた当事者は、農村  
内ではその産業化と構造改革の渦中で個人としての生存に成功した者であ  
り、農村で生きていこうと生活の方向を決めた時以来、若い頃から生存競  
争の「成功者」として生きなければならなかったという事実が見逃されが  
ちであるからである。

---

<sup>50</sup> 生死の境を彷徨うという辛い闘病生活のなかで、権純徳は二つのできなかったことをすると、余生の方向を決めたと、筆者らに述懐する。一つは妻のために生きること、もう一つは日記を出版することであった。金泉・権純徳家、訪問インタビュー、2013. 7. 11.

これは産業化時期の農村と農業、また農民らが直面した構造的状況が、都市低賃金構造を下支えした低穀価と物価安定化政策の基礎の下で、犠牲者の位置であったことを否定するものではない。しかしながら個人の実存的状況から考えた際、研究者らが一般的に選り好みする長期的な日記記録者は、構造的矛盾と逆境のなかでも経済的に成功を納めた人々であり、長期的に記録された日記自体が「生存という成功」の証拠でもある。特に現代社会が農地改革を契機とした在来の小農社会の法的・制度的完成期、また最終的局面という観点で考えた場合<sup>51</sup>、小農社会の経済倫理が富の拡大と蓄積よりは、小農としての生存自体に重心があるとする古典的論議は、吟味され再解釈される必要がある。古今東西を通じて、小農らには自分たちの生存こそが成功の証明であり、資本主義支配の下でその接合局面を生きてきた現代社会の農民に対しても、やはりその物差しに照らし合わせて判断する余地があるだろう。

またわれわれは多くの場合、長期日記記録者らがマウルや地域社会の現場で現代農村の構造改革過程を主導してきた者でもあるという点を、念頭に置かなければならない。本稿で検討した『日記』はもちろんであるが、他の多くの日記記録にも描かれるように、現代の生活日記の長期記録者らの大部分が、多大な勤勉性・積極性を基に経済的機会を得ようと努力を怠らなかった。また彼らは官公署や金融機関・国家機構とその実務陣の一定の支援の下で、農村に分配された希少な経済的機会をつかむ「特別な能力」を示してきた。実際の開発独裁国家の農村政策が、小農らが密集する社会のなかから彼らを引き抜き出す過程であったなら、長期日記記録者はこの政策基調を体現する化身であるとも考えることができる。この点に関して、より積極的な歴史的・社会科学的評価が必要になるのではないか。

周知のように、植民地統治からの解放以来の現代韓国の農村の型を規定

---

<sup>51</sup> 안승택, 前掲書, 2009, 345~354頁。

する韓国の農地改革は、北朝鮮の土地改革を意識しながらも、またそれと競争しながら成立した。また分断体制下の「二つの政府」間の競争と対立は、朝鮮戦争という熱戦を経て、周期的に加熱と冷却を反復する長期的な冷戦体制の最前線の状態へと継承された。よって朝鮮半島内で大土地所有者としての地主層を、階級という意味で完全に一掃してしまった農地／土地改革は、二つの対立する体制が「国民」の大多数であった小農を自身の支持基盤として確保するためには、不可避な社会史的契機であったと考えることができる<sup>52</sup>。

一方、在来の温情主義的な「静態的地主」を、より冷酷な合理性を持った「動態的地主」に変えた日帝の植民地主義は、当時の社会性格が植民地地主制と評されたように、朝鮮の在来の地主制と渾然一体となって、それをより資本主義的に強化することで、植民地主義からの解放と共に、地主制自体の撤廃さえも当然のものと思うようにさせる、決して意図したものではない社会史的動因になったといえる。その結果、「耕者有田」という在来のイデオロギーをその文句そのまま憲法に刻むことで制定された韓国の1948年体制は、在来の小農社会の法的・制度的完成という観点から評価が可能である。近來の韓国史研究内の小農社会論で、17世紀の小農社会の成立が既存の韓国史で設定する、その他の近代起点より重要な分岐点になったという評価<sup>53</sup>が、合理的でありうる背景の一端がここにあったと考えられる。現代韓国の農村と関連して、「資本主義の農村」ではなく「資本主義 - 小農社会の接合局面の農村」だと考えるほうが、より一層合理的で豊富な分析の余地を提供するようになる理由もここにある。

この問題意識によると、上記のような過程を経て誕生した大韓民国の1948年体制に対する評価は、資本主義と小農社会の本格的な接合であると

---

<sup>52</sup> 조석근, 前掲論文, 2001; 조석근, 前掲論文, 2015.

<sup>53</sup> 미야지마 히로시, 前掲書, 44~81頁。

いう地点から、再び論点が分岐するのではないかと考えられる。本稿では、農民とも労働者とも、また商人とも職人とも捉えることはできないが、そのすべての面を一緒に持つ経済主体が主導する小商品経済を、資本主義と小農社会が接合された体制自体の重要な動力として考えようとした。これまでの研究過程におけるこの接合を真摯に受け入れようとするならば、従来の経済学的な議論では両立が難しく、または「非公式経済」という定義の難しい剰余の経済的範疇によって処理されてきたものに、もっと本格的に照明をあてるべきだと思われる。特にこれが「財閥のための国家主導的産業化」という経済開発モデルの代表事例でもある韓国の経済体制と同程度に、この小商品経済を再評価することは、学術的にも重要な意義を持っているのではないかと考える。

本稿では、集团的・構造的には衰退と絶滅を強制されながら、同時に個人的・実存的には生存と拡大蓄積に成功し、開発独裁期の農村政策の化身となっていく農民らの生活の姿を提示することで、この問題に対する解答の糸口を探そうとした。結果的に所有することとなった富の量に対する評価と別に、農村人口の過疎化は都市の誘因が農民を引き込んだ結果であると同時に、農村に残ろうとしたものの、そこでの生存に成功できなかった者が農村を去ることによって引き起こされた社会史の結果でもあるだろう。構造的圧力と個人的選択は、両者が相互に対峙しつつ、実存の次元で一方が他方に対する優位を主張しようとするが、すでに両者は互いに組み合わさっており、事実上一つになっている。

この両者の対峙現象の分析を通じて、個人の次元の経済的生存戦略に対する探求が、脱植民主義と冷戦時代の構造的動力の原理を捉える方法にもなるという希望を筆者は持っている。ある者の目には構造的分析と個人的分析の混同のように捉えられるかもしれないが、その結合こそがわれわれの世代の人文科学と社会科学が追求すべき一方向であるというのが、本稿の問題意識である。従来の社会史的分析は、構造を中心に論議を反対方向か

らだけ進めることで、「産業化時代の被害者としての農村・農民」という歴史像に、過度に傾倒していたのではないだろうか。

また、この分析を可能にするためには、個人的・地域的・時期的次元の歴史的眺望が可能な日記という資料の活用が決定的だったという点と、そしてその資料と論議の余白地帯では長期的日記記録者とは異なり、農村での生存に成功できなかった無数の農民がいたという点を、指摘しておかなければならない。蛇足ではあるが、この「失敗者」に対する関心が「成功者」に対する分析の実質的な動機付けになるのではないかという点と、「成功者」の戦略を綿密に観察することで、「失敗者」らのそれまでも含んだ、開発独裁期の農村での生活を理解できるようになるのではないかという点を、最後に記しておく。



## 参考文献

### ○史料

농림부 『농림통계연보』 1968.

이정덕·소순열·남춘호·문만용·안승택·송기동·진양명숙·이성호 편 『농민 권순덕의 삶과 기록 : 아포일기(1)』 전북대학교 출판문화원, 2014.

이정덕·소순열·남춘호·문만용·안승택·이성호·김희숙·김민영 편 『농민 권순덕의 삶과 기록 : 아포일기(2)』 전북대학교 출판문화원, 2014.

이정덕·소순열·남춘호·임경택·문만용·안승택·이성호·손현주·진양명숙·이태훈·김예찬·박성훈·김민영 편 『농민 권순덕의 삶과 기록 : 아포일기(3)』 전북대학교 출판문화원, 2015.

### ○著書·論文

구해근 (신광영 옮김) 『한국 노동계급의 형성』 창작과 비평사, 2002.

권내현 「내재적 발전론과 조선 후기사 인식」 『역사비평』 111, 2015.

권오훈 「도시빈곤층의 직업 형성과정 : 서울시 빈곤지역을 중심으로」 『사회과학논총』 10, 한양대학교, 1991.

김경일 「1960년대 기층 민중의 가계와 빈곤의 가족 전략」 『민주사회와 정책연구』 28, 2015.

김차두 「도시비공식부문의 가족노동」 『논문집』 9, 부산산업대학교, 1998.

마츠모토 다케노리 「전후 일본에 있어서의 조선근대경제사연구의 계보」 『역사문화연구』 53, 2015.

미야지마 히로시 『나의 한국사공부 : 한국사의 새로운 이해를 찾아서』 너머북스, 2014.

박영숙 「도심지빈민은 어떻게 살아가는가」 『한국사회연구(2)』 한길사, 1984.

박진도 「농촌주민의 계층구성 및 그 성격에 관한 사례연구」 『충남대경상논집』 3(2), 1981.

박진도 『한국자본주의와 농업구조』 한길사, 1994.

박진도 「이농의 전개과정과 그 의미」 한국농촌경제연구원 『한국 농업·농촌 100년사 논문집 제2집 : 한국 농촌사회의 변화와 발전』 한국농촌경제연구원, 2003.

안승택 『식민지 조선의 근대농법과 재래농법 : 환경과 기술의 역사인류학』 신구문화사, 2009.

안승택 『광고산 마을의 공동체 문화』 수원박물관 편 『광고산이 품은 두 마을과 연무대 옆 마을 : 수원시 상광교동·하광교동·연무동』 수원박물관, 2015.

에릭 R. 울프 저, 박현수 역 『농민』 청년사, 1978.

오명석 「농민의 '전통' 과 '근대성' : 말레이 농민의 경제와 문화를 중심으로」 내산 한상복교수 정년기념논문총 『한국문화인류학의 이론과 실천』 소화, 2000.

- 윤수중 「농민층의 계급론적 성격」 서울대사회학연구회편 『사회계층』 다산출판사, 1990.
- 윤수중 「농촌 내부의 경제력 집중에 의한 농민층분해와 농민간 갈등」 『논촌사회』 11(2), 2001.
- 이성호 「신빈곤층 사회적 네트워크의 해체와 대응 전략」 남춘호·이성호·노중기·진양명숙 『전북지역 민주노조운동과 노동자의 일상』 한울, 2009.
- 이성호·안승택 「1970~80년대 농촌사회의 금전거래와 신용체계의 변화 : 『창평일기』를 중심으로」 『비교문화연구』 22(1), 2016.
- 이영기 「1960년대 이후의 농민층 분해에 관한 연구」 서울대 농업경제학과 석사학위논문, 1982.
- 이영훈 「한국사에 있어서 근대로의 이행과 특질」 『경제사학』 21, 1996.
- 이영훈 「조선후기 이래 소농사회의 전개와 의의」 『역사와 현실』 45, 2002.
- 이지은 「오늘의 농촌여성」 『창작과 비평』 14(2), 1979.
- 임수환 「박정희 시대 소농체제에 대한 정치경제학적 고찰 : 평등주의, 자본주의 그리고 권위주의」 『한국정치학회보』 31(4), 1997.
- 정연태 「일제의 한국 지배에 대한 인식의 갈등과 그 지양 : 한국 근대사 인식의 정치성」 『역사문화연구』 53, 2015.
- 조석곤 「20세기 한국토지제도의 변화와 경자유전 이데올로기」 안병직 편 『韓國經濟成長史 : 예비적 고찰』 서울대학교출판부, 2001.
- 조석곤 「식민지근대를 둘러싼 논쟁의 경과와 그 함의 : 경제사학계의 논의를 중심으로」 『역사문화연구』 53, 2015.
- 지역문화연구소 편 『평택 일기로 본 농촌생활사 I : 평택 대곡일기 (1959-1973)』 경기문화재단, 2007.
- 지역문화연구소 편 『평택 일기로 본 농촌생활사 II : 평택 대곡일기 (1974-1990)』 경기문화재단, 2008.
- 캐롤라인모저·케이팅영 「가난한 노동자들 속의 여성」 이효재·허석렬 편 『제3세계의 도시화와 빈곤』 한길사, 1983.
- 허석렬 「도시 무허가정착지의 고용구조 : 사례연구」 『한국사회연구(1)』 한길사, 1983.
- 宮嶋博史 「東アジア小農社会の形成」 溝口雄三・濱下武志・平石直明・宮嶋博史編 『長期社会變動』 東京大学出版会、1994年。
- 宮嶋博史 「儒教的近代としての東アジア「近世」」 和田春樹ほか編 『岩波講座 東アジア近現代通史』 第1巻、岩波書店、2010年。
- Roberts, B., *Cities of Peasants: The Political Economy of Urbanization in the Third World*, London: Sage Publications, 1978.

やすだまさし  
(安田昌史 訳)